ゆくこと返ること

一

いつからこうなっただろう。

俺はメールを打ちながら考える。最初使った慰さめの言葉は、いまはもう出て来ない。知らねえよ、だいたいお前は、とり繕わない厳しい言葉は、然し無視には変らない。あいつを無視するのが怖い。一人でどうにかなるんじゃないかと想像する。こんな関係を続けてもう三年になる。

正子と出会ったのは高校二年の時だ。あいつは、正子は、顔立ちは悪くなく、多少地味だったが、笑い話にも参加してごく普通の生徒だった。実際ごく普通の人間ではあるだろう。俺は仲好くなって携帯のアドレスを交換して、時々だけどメールする様になった。

あいつを好きだった時期は、あっただろうか。高校の俺はとにかく寒衣なかったので、メールが出来る女子と言うのは貴重だった。しかし、なかっただろうな。俺は高校の間ひとりの女が好きだった。名前はまだおぼえてる。三代さんだ。顔は、顔も、覚えてる。が、そんなに判然とではない。卒業アルバムで確認しようかと思う。でもめんどくさいなと思う。夫で廃めた。

正子とは、友達で、皆なで遊びに行く事もあった。楽しかった、と思う。メールの回数が少しだけど増えて、電話がくる事もあった。用件もない、会話。とくに気まずさは感じなかった。メールをする時も正子から俺に送って来たので、正直にいうと、俺の事が好きなのか、と疑う事もあった。でも夫は女側からすると大いなる勘違いで、気もち悪いというのが俺の四囲の女の意見だったので、だれにも言わなかった。勘違いだと怖いから俺から正子を誘う事

もなかった。俺れ達は友達の儘三年になって、偶然又同じクラスになった。

俺れは三代さんの事を諦らめ懸けていた。何で好きだったのかは今となってはわからない。美化をしていたのだろう。よけいなもの許りだった。三代さんはとびきりの美人で、だから、俺れ如きじゃだめなんだと思い込んでいた。思おうとした。だめか、だめじゃないかは、相手がきめることでだからとにかく当って見ればよかったんだ。俺れは余計なもの許りでしかもその余計なものの為に思い切ろうとしていた。でも学校で見懸る三代さんは美人で俺れは目を奪われた。

夏、正子からメールが来た。「ごめん、もし、もし暇だったらでいいんだけど、ちょっと会わない？」夏休みはまだ始まっていなかった。俺れは、ひまだったので、いいよと気軽に答えた。其くせ内心ドキドキしていた。女の子からそう言われるのなんて始めてだった。何所で会うかと言う話しになり、俺れはバイクをもっていたので其地まで行くよということになった。正子の家迄はバイクで十分位だった。近くの公園で待っていると落着かなかった。俺れは公園の鉄棒で時間を潰した。正子がきた。

「何してんの」

「……逆上り」

「楽しい？」

「君もやってみれば、この気もちがわかるんじゃないかな」俺れはいった後に正子がスカートを履いていることに気づいて失敗ったと思った。下心があると、思われなかっただろうか。

「私、できないんだよね」

「逆上り？」

「そう。だから、体育の鉄棒の授業嫌い」

俺れは鉄棒から下りた。俺れたちは只台に座った。話しをした。たわいもない話し。そのあいだ、俺れはもし告白されたらどうしようなんて考えていた。断わろうなんて思っていた。おれ、好きな人

いるし。でも其様な叶う望みのない人より目の前のこいつでいいんじゃないかと思った。いや、そんなの失礼だろう。遠くの薔薇より近くの蒲公英。皐蠅えなと思った。一人でぐるぐる考えた。然し正子からはいっこうに何の話しもなかった。仕舞いには俺れから切り出した。「なんか、話しでも、あった？」正子はキョトンとした「いや、別に」別にじゃねえだろう。人を呼び出しといて。俺れは憤った。もし次呼ばれても絶対来ねえ。俺れは決意しながら帰って、夏休みが始まって、其直後に呼び出された時ものこのこ出ていった。

その時も別に何もなかった。

夏休みは殆んど会わなかった。俺れ達は受験で、勉強していた。メールは、最初のほうは屡ばという程度だったが、夏休みの終りには略毎日していた。其時にあのメールが来た。

ごめんね、あたし、時々頭がおかしくなることがあって、そういう時はメールしたくないの。いつもなら全然平気を装えるんだけど、〇〇毎日メール送ってくれるから、いつやめたらいいのかわかんなくて。〇〇のせいとかそういうことじゃないんだよ？悪いのは私。こういう気分のときは、メールなんてとてもできなくて、だからごめんね。どういう気分だよって話だよね。ごめんね。〇〇がメールしてくれるのは本当にうれしいんだよ？　でも、だから、あたしにはつらくなる時がある。申し訳ないんだけど、できれば、返事も返さないでください。お願いします。

俺れはなんだこれと思った。度肝をぬかれた。何だか、あいつは平生俺れから積極的にメールをしたがっている様に感じているのではと文面から思った。いや、メールを送って来るのはお前だろう。俺れは夫に答えている丈で、決して、メールをやめたらやめたで困らないし、見ろ、今回のメールの遣取りが始まったの――二週間前だけど――お前からメール送ってきてるからだぞ。俺れはわざわざメールの履歴を遡って確認して、自分を自分が正しいと思える位地

に置いてから、メールを返した。

いや、そんな、謝ることないよ。頭がおかしくなる時かあ、俺も、毎日勉強してるとストレスで気違いになるんじゃないかって気がするよ（笑）でもここで頑張らないと大学行けないから、やることはしっかりやらないとね。メールとかは、俺は、全然気にしないから大丈夫だよ。気にしないで。そのうちそういう気分じゃなくなって、まあ気でもむいたらまたメールしてよ！

俺は優しさの事を考えた。あいつが是で救われなかったのは、あいつがなにでも救われないのは、後のあいつを見てれば分る。でも此時はわからなかった。俺はあいつの上皮丈なでた。夫は別にいいことでも悪いことでもないだろう。あいつは他者を求め過ぎる。夫は単に俺の見解で、あいつの正しい像なのかは俺には分らない。誰にもわからない。あいつ自身分っていないだろう。だから苦しむんだろうか。あいつの苦しみなんて表面丈だ。そう言う可哀相な所に自分をおきたい丈だ。それをあいつにその儘伝える勇気は俺れにはない……夫が、其見方がもしも間違っていたら、俺は無意味にあいつを傷ける。

正子からメールは返って来なかった。慰さめのメールを送った事で「ありがとう。気が楽になった」などの返事を期待していた俺は、すこし失望した。なんだよと思った。その一週間後に正子からはメールがきた。夫は普通の、いつも通りのごく尋常なメールだった。

二

夏休みがおわって学校であう時、一寸気まずかった。メールの上ではもう普通だったが、実際に会うとなると、どんな顔をして好いのかわからなかった。俺れ達は真面には顔を合せず、いつものグル

ープに混じる事で、すこしずつ平調を攫んだ。

正子とのメールはまた頻繁にしていた。俺れはもし俺れが正子とメールしたがってると思われては堪らないので、話題が一段落したなと感じると「またね」抔の言葉を付けて終らせようとした。しかし正子からは当然の様に続行する返事が送られてきた。俺れはこいつ能く分らねえなと思った。まあ、お前がしたいんだったら、好いけどさ。俺れはいつでも人より自分を優位においた。其様なのみんなしていると思うけど、左様いう自分を意識するのは後ろめたくて、意識しない様にした。

夏だった。夏休みは終って、でもまだ夏の暑さで、俺れは温暖化の事を考えた。正子は、正子はどうだろうか。あいつと其んな話しをした事があっただろうか。俺れとあいつは、皆なで、日曜に映画を見に行く予定をたてた。俺れは偶の息抜に心を弾ませた。水曜、木曜、学校は終っていって、予備校に通って夜が来て、金曜がきて、終った。俺れは土曜の朝に目ざめた。枕元の携帯をみる。メールがきていて、夫は珍らしい事だったので、驚ろいた。

夜中にごめんね。私、不眠症だから夜眠れない事が多いの。眠れない、眠れない夜は手持ち無沙汰で、だからメールなんて打っちゃった。ごめんね。〇〇って、メールの着信音とかで起きるタイプだっけ？　だったらこんな時間に起こしちゃってほんと申し訳ないんだけど、〇〇そんな繊細じゃないよね（笑）なんて、余計なお世話だよね、ごめんね。眠れない夜って、つらいんだよ。まあ眠れる人にはわかんないだろうけど、眠いのに眠れなくて、だから眠いから勉強とかしようにも手につかなくて、何もできないの。わかる？　わかんないよね。私はいまベッドのなかで携帯触ってる。ああ、明日の映画、起きれるかな……

正子だった。メールが送られて来た時間をみると、午前四時を過ぎている。俺れは少し、怖くなった。あるいは気もち悪くなった。夫

でも違うなら、正子の事を、厄介に思った。面倒くせえと思った。俺れは平生、返事は遅くとも三四時間以内には返すよう心掛けていた。今回は気が乗らなくて夜迄返さなかった。明日みんなで出かけるのに返さないのは流石にまずいと思って、返事をした。全然、俺れは、夜中にメールでおきる様な繊細な人間ではない事。だから気にしなくて好い事。あと眠れないなら病院にちゃんと行きなさいと言う説諭。俺れはこれが優しさだと思って居た。厄介に思った自分を、面倒に思った自分を伝えないで、相手の気持を汲んだ佯をして接するのが。違った。すくなくとも、正子の場合は、違った。あいつは優しさなんて要らなかった。俺れにそばに居てほしいだけだった。いまいうと詰らなくなって仕舞うだろうか？　俺れは正子に好きと言われた。この時よりもすこし先に。俺れは好きじゃないといった。お前の期待には何も蚊も答えられないと言った。嗚、ちがうじゃないか？　俺れは、「有難う」と、そう言ったんだった。でもごめんって。答えられないって。あいつは何て思っただろう。とに角俺れとあいつの関係は今もつづいている。いつ迄続くだろう。先を急ぐ必要はない。けれど、いう事もないから、とにかく先に進むことにしよう、……

映画に行ったのは五人だった。男三人と、女が二人。俺れは正子と二人になりたくなかった。だからなるべく正子を避けた。所が正子も俺れを避けていたので驚いた。皆なで飯を喰っていた際、俺れがなにか自分に関する話しをした。たしかに面白い話しでなかった自覚はある。然し、みんながする程度の、時間潰しの、沈黙潰しの、そう悪くない話しだった。其俺れの話しがおわった一呼吸で正子は言い放った。

「それが何うしたの？」

場の空気が固まる程慳貪な口調だった。俺れは夫が正子から発せられたものだと思えず暫しぼうっとした。夫が正子から発せられたんだと気づくとなぜか狼狽えた。俺れが、優位に、立っていたんじゃないのか。憤りも覚えた。しかし夫は狼狽と御茶交ぜの怒りだ

った。もうひとりの女の子が「どうしたの？　機嫌悪いの」と正子を取成した。男からはお前なんかしたのかよとあとでいわれた。俺れはなにかした覚えはなかった。寧ろ優しく接した記憶しかなかった。きょうの態度が忿付いたのだろうか。そんな明ら様に避けた筈はないが。じゃあ昨日の返信？　夫こそわからない。俺れは帰ってから、考えた末、一応メールを送った。

ごめん。なんか、俺、怒らせるようなことしたかな？　正直に言って原因があんま思い当んなくて、ごめん。もし気に障ることしたんだったら、言ってくれれば、直すからさ。ほんと、今日は、ごめんね。

なぜ俺れが此んな低姿勢を取らねばならないのだろう。俺れは送る直前迄、いや送ってからもムラムラと考えた。然し此儘放置すれば、教室で過し悪くくなり、お互の気分を損ねてしまうだろう。長期化すれば夫こそ厄介だ。俺れは厄介の種を早めに抓んでしまいたかった。だから打算して謝罪のメールを送った。その夜は正子から返事がこなかった。しかし俺れは割合にグッスリ寝た。返信に気付いたのは朝起きてからだ。送信時間は夜の三時。

ううん、あたしこそ、ごめんね。私、〇〇に私怒ってるんだぞって、知ってほしかったのかもしれない。子供だよね、ごめんね。ほんとはあんなことというつもりなかった。でもつい口から出てて、なんかすっごいムカついてて、映画も、あんまり、楽しめなかったなあ。またみんなで遊びにいこうね。みんなには、あたしから、別に〇〇に怒ってたわけじゃなくて機嫌悪かっただけだって言っておくから。あ、今度映画行くなら恋愛映画のほうがいいかも（笑）

俺れは、怒ってた理由が、しりたかったんだけど。

俺は何度かメールをよみ返した。夫から自分の送信メールもチェックした。「理由を教えて」ぐらいいうべきだったのか。しかしそれで詰問口調になり謝罪が疎々かになっては意味がない。何方にしろ、もっと遣様はあったのだろう。俺はいつもうまくやれない。後から何度も何度も其「遣様」の事を考える。旨くやれていた自分を思い浮べる。夫が活かされた事はいまのところない。是からもないかもしれない。あるかも知れない。取敢ず、正子が機嫌を直した事で堵とした。争いの事を考えた。感情が打かるだけの、不毛な争い……本当に、不毛だろうか。衝突は無意味？　俺は考えるのがきらいなので疑問を放置した。

その癖いつまでも考える。

学校に行った。友達が笑い話をして笑っていたので、一所に笑った。

三

俺は、正子の事を、本格的に面倒くさい女と見做し出した。最初はそれを表面には出さない様にしていたが、段々態度にも表われ出した。或日又、俺は正子から呼出された。然し勉強が忙しいと言う理由で断った。メールの返事は故意と遅らせた。一日に一通位で済むよう仕向た。ある日、音楽の授業があって俺は音楽室にむかった。音楽室にはまだ何人かの生徒しかいなかった。俺は座って単語帳をよんだ。だから正子がはいって来たのにきづかなかった。正子は俺に言った。

「ねえ」

俺は顔をあげた。

「私の事さけてない？」

「避ケテナイヨー。何で？」

「いや、絶対さけてる」

「だから何でって。そんな事ないって」

「だって、前と態度ちがわない？　メールだって、最度細心にしてたでしょう」

「夫は真面目に勉学に取り組んでる証拠じゃないかな。きみも見習うといいよあっ！」

「何よ」

「猛烈にトイレ行きたくなって来た。猛烈にトイレいきたくなったので猛烈にトイレいってきます」

俺れは正子からにげた。あんなクラスメイトがいる場所であんな詰問をするとは信じられなかった。同じグループの奴らがいなかったのは救いだった。もし、同じグループの面々がいても、正子は同じように詰問しただろうか？　夫にはするとも言えたししないとも言えた。つまりどちらとも言えなかった。あれが痴話喧嘩というやつなのか。この時女と付合った事のなかった俺れは冷汗をかき乍ら考えた。あとで辞書を調べたら痴話喧嘩と言うのとは少し違った。でも俺れはあれを痴話喧嘩と号んだ。痴話喧嘩と号んで最悪なものと位置付けた。以来俺れはぎりぎりの時間に移動するのが習慣となった。

左うして正子への不信感が高った。

苛立もつのった。態度も変わった。結構露骨に避ける様になった。幸い勉強に打込んだふりをすれば、友人の輪から外れていても違和感は持たれなかった。友人から「御執心じゃん」と言われると「やばいよーおれ此儘じゃ大学いけないよー」と泣言をいった。実際俺れの成績は芳しくなかったのでそれを知っている友人は「落ちろ。凡ての大学に滑ってしまえ」とやさしい言葉を投げ掛る程度で夫以上踏込まなかった。しかし其んな状態の俺れにも数正子は話し掛けて来た。

「何勉強してるの」

「数学」

「ふーん、やっぱり、難かしい？」

「そうだね。おれは苦手かな」

「そっか……」

「この間、私ね」

「うん」

「夏目漱石、よんだんだ。勉強の合間だから、すこしずつなんだけど、あのおっさん基本的に話長くない？　途中でいやになったから、やめ様かなと思ったんだけど、やっぱ最後まで読まなきゃ其作品を味わったことにならない気がして、此間よみおえた。でも、その感覚って、よくない事だよね。途中で廃めたくなったら廃めちゃえば好いんだよ。誰も怒らない。それでも、読むのは、たんに自分のためなんだよね、……」

「そうかもね……」

「でも、あたし、あのおっさんすきだったな。たぶん、頭可怪しかったんじゃないかな。へんだよ、あのおっさん。頭がへんだったらもっと体裁つければ好いのに、頭がへんなまま書いちゃってさ……」

「俺れ、夏目漱石、よんだ事ない……」

俺れは早く何処かいけと思った。でも途中で忘れた。おれがどんなに素っ気ない態度をとっても、時々正子はとなりにきた。左うして俺れにはよく分らない話しをして行った。俺れはこの距離感の事を、楽だなと思った。自分を繕ろわなくて済む。自分で話しをしなくてすむ。興が乗れば会話もした。俺れは余り笑わなかった。正子も別に笑わなかった。友人は不審の念を抱いたらしかった。お前ら、何ういう関係なの、きかれた。どう言うって、そりゃ、ともだちだよ。俺れは答えた。お前××をさけてる見たいだから、何かつきあって別れたりしたのかなと思ってたけど、話す時ゃふつうに話してるし。友人にいわれて俺れは、俺れ、××、避けてたかな。さけてただろ。お前顔に出るから、嫌そうな感じすっごいしてたよ。俺れは友人にみぬかれていて少し赤面した。

此問答が正子に伝ったらしかった。校内を歩いて居ると、正子

から呼び停められた。
「あたし、友達なの」
「うん？……そりゃ、まあ、ね」
「普通の？」
「普通の」
「特別なとこなんて、なにもない感じ？」
「そうだね、特別なとこなんて、なにもない感じだね……」
「そう」
正子は去って行った。俺れにはなんなんだかわからなかった。此奴は俺れの事が好きなのかなあと思った。然し友人に相談するのはやっぱり恥しくてしなかった。もし好きでも、好きな人云々のまえに正子とつきあうのはないなと思っていたので、この儘そっけない態度を取り続ける丈だし、もし好きじゃないならそれこそ何うでもいいからなにも改める所はない。俺れはそう処置を決めてまた勉強に取組んだ。
其日から正子のメールが杜絶えた。正子は俺れと逢うと睨み付け、のしのしと歩き、ドアを大きな音をたててしめた。俺れは子供かと思った。その怒りかたは何だ。謝りのメールを入れ様として廃めた。彼奴が怒ってんならしょうがない事だし、あいつが俺れの事好きでも嫌いでも改める所はないし、俺れは、彼奴の事、べつに好きじゃない。特別じゃない。三代さんの事を考えた。俺れの片思いの人。特別の人。三代さんと正子では、体温が違った。質感が違った。正子のほうが生温かく、歪で、人間だった。三代さんは妖精や画の中の人と変らなかった。俺れは正子の事好きじゃないんだと思うと同時に、三代さんの事も好きじゃないんだと思った。同じクラスになった事なくて、遠くで見ている丈の人。三代さんは美人だった。欠点のない、均整った顔をしていた。しかし夫は魅力だろうか。あの顔が人間味を帯びれば、或は魅力にもなるだろう。でも俺れはあの人の事知らない。なにもしらない。俺れのなかで、あの人はまだ人間じゃない。画の中の人だ。牽き摺りだすには、あの人と接する

しかない。接すれば失望するかも知れないしのめり込むかもしれない。俺れは、あの人を、人間にする気があるだろうか。そこ迄の労力を払って、近づきに為り度いと思えるだろうか。思えない。別に、憧がれは、憧がれで好い。めんどくさい。俺れは正子がめんどくさい人間なのだか、俺れがめんどくさがりの人間なのだか分らなくなった。

正子が怒り出して一週間もした頃、正子からメールが届いた。それを公開するのは些か仁義に悖るとは思うが、今更隠したところでどうにもならないと思うので曝らす。其代り、俺れのも曝そう。代りにはならないが。

私、気まずくさせてるよね。ごめんね。でも、気にしなくていいよ。私、〇〇のこと好きなだけだから。こんな形で言われても困るだろうし、振り向いてもくれないよね。でも、私のこと友達だって言い切られたのがむかついてむかついて、困らせたくて、あんな態度とったの。私、いつから好きだったんだろう。〇〇って、全然、いい男でもないし、性格もひねくれてるよね。もうやめときなって自分に言って、諦めようとしたんだけど、そんな自分の中で勝手に一人で諦めるなんて馬鹿らしくない？　伝えれば、もしかしたら、大逆転が起こるかもしれない。まあ、私の場合起こらないだろうけど（笑）

〇〇のことが好き。話してて、昔はたくさん笑ってくれて、うれしかったなあ……それを壊したのは、私なんだけどさ。まあ、そんなわけだから、これまでの態度も反省して普通にできるようにするからさ、また友達でいてあげてよ。こんな性格の暗い子嫌かもしんないけど、まあ、そんなこと言わずにさ。じゃあ、また、学校でね。

ありがとう。××の気持ちは嬉しいけど、でもごめん。俺、×

×のこと好きだけど、でもそれはそういう好きじゃないから、その気持ちには応えられない。なんで好きには何種類もあんだろうな。一種類だけだったら融通利いて便利なのにな。俺、お前のことたしかに暗い子だと思うけど、でもそれはそれでいいんじゃねえかな。それがいつかプラスの力に変わるよとか、そういうの、よくわかんねえけど、暗かったら暗かったなりのいいとこあるじゃん。ねえか？　よくわかんねえけど。

俺も、普通に話しかけてくれりゃ普通に返すからさ、そこは××の好きでいいよ。メールとかもすんでもしないんでもどっちでもいいしさ。なんか中途半端かな。まあ、したかったらすりゃいいししたくないんだったらしなきゃいいっていう、なんかそうゆうね。感じでいいんじゃないかしらん。てな訳で、とりあえずまた学校でな。

あ、ちなみに全然いい男じゃないといわれてヘコみました。今日は枕を濡らしてベチョベチョにするので明日のヘアスタイルが変だったらそれは君のせいだと思って下さい。

四

俺(おれ)は大学の志望校に受かり正子(しょうこ)はほぼ悉(ことごと)くおちた。俺(おれ)は不憫だなと思った。正子(しょうこ)は恨みつらみ無念さを俺(おれ)にメールで送って来た。私はダメな人間だ。生きる価値がないんだぐらいに言って来た。俺(おれ)はたしかに今回は駄目だったよ。でも夫(それ)はお前がダメとか左右(そう)いうことじゃなくて駄目だったからじゃあ来年もいっちょ頑張ってみるかっていう事なんじゃないの？　と言う様な内容で答えた。それが正子(しょうこ)にどの様な影響を与えたのかは知らない。

大学に這入(はい)ると毎日あわなくなったのでメールする回数がへった。といってから違和感に気付いた。毎日あっている方がメールする必要もないんじゃないのか？　そう思ったが実際減ったものはし

ようがない。正子は浪人することになり邪魔しては悪いと思ったのと抑俺れから連絡を取りたいと思った事がないので俺れからはメールをしなかった。正子からは時々どんなことがあった、という報告書の様なメールが届いた。卒業して二カ月位してから二人でのみに行った。俺れは大学に這入って熟れていたので何んとも思わなかったが、正子は居酒屋にはいるのは始めてだといってきょろきょろした。俺れ達は乾杯して飲み始めたがどんな話をしたのだったかは忘れた。

夫から三四回月に一二度のメールをして、半年以上連絡をとらない日々が続いた。新しい生活になれた俺れはバイトをしたり遊んだりして、時々、不意に正子の事を思い出した。あいつは元気でやっているだろうか。勉強は捗取っているのだろうか。思うだけで俺れから連絡をとろうとは思わなかった。その時は受験の真最中で迷惑だろうと思った事もあったが、もし左うでなくても結局連絡しなかっただろう。三月の終りに正子から「久しぶり。またどこかで飲まない？」と言うメールが送られて来た。俺れは当時の彼女になにもいわず了承した。当時の彼女はやたらと浮気を気にする人だった。でも話すのがめんどくさいので黙って行った。

「彼氏に、振られちゃってさ」

飲み始めて早々正子はいった。俺れは大学の成否を聞きたくてきたのに左んな話しをされ面喰った。

「何、お前、彼氏いたの」

「そう、あれ、言わなかった？」

「浪人生っつったら普通色恋より勉強だろう」

「潤いは必用じゃんよ。それとも、なに、妬いてるの？」

「なんで俺れがお前に妬くんだよ」だから半年間連絡がなかったのか、と心づいた。「それで、何でふられたの」

「彼氏も同じ予備校の人だったんだけどさ、私が逢いたい逢いたいいってたら、勉強の邪魔するなって怒られた」

「まあ、そりゃ、怒るだろうね」

「だから私も怒っちゃったのよ。あいたくって何が悪いのよって。なんか、それでぎくしゃくしちゃってね」

「あ、そう」俺の携帯が鳴り出した。彼女からメールが届いた。「どこいるの？」だそうだ。きょうは、高校のともだちと呑むと言ってある。俺はめんどくせえなあと思った。正子は「なに、彼女」ときいて来た。

「そう。今どこいるのだってさ」

「は？　彼女居るの」

「ああ、まあ、はい……」

正子は急速に機嫌を損ねた。「考えらんない」ポツリと独語く。「いや、××だって、彼氏いたっていってたじゃん……」俺が小さな声で言うと夫には反応しなかった。気まずい時間が流れる。俺は取敢ず彼女にメールを返した。其まま酒をのんだ。なんとか大学の合否に話しを戻すと正子がうかったのは第一志望より何個か下のランクの学校だった。

彼氏なんか作ってるからだ。

俺は思ったが口には出さなかった。其日は何うにか別れた。然し彼女がどう遣ってか俺の高校の友達と連絡を取り、俺がその日飲むと偽った男友達といなかった事が発覚した。「だれと居たの」彼女は本気の目で俺を面詰した。「いや、高校の、友達で……」俺は目を外らしたが其時俺の携帯が鳴った。彼女は俺に無許可で携帯を手にした。正子からメールが来ていた。「この女でしょ」勘の鋭どい彼女は俺に携帯を突き付けた。俺は素直に認めしかしこいつとは恋愛関係と縁遠い所にいると説得したが信じて貰えなかった。非どい非どいと泣きだしたので別れる事となった。

俺は正子に別れた事をいわなかった。然し以来正子からは細心にメールが来る様になった。その多くは訳のわからないものだった。

毎日勉強勉強の日々から解放されて、楽にはなったけどさ、この空白感ってのはなんなんだろうね？　〇〇も感じた？　目標が

なくなったからかな。大学に入ることが目標ってのは本末転倒だけどさ、でも、しょうがないよね。社会全体がそういう動きってのもあるし、いや、結局、言い訳なのかな。私、大学で何がしたかったんだろうなあなんて考えてるんだよね。こんなのみんな考えるらしいね。つまんないなあ、あたしの悩みなんて。

〇〇は、なんかで悩んだりしてる？　大学のこととか、人生のこととか。私人生って言葉嫌いだな……ありふれてて、みんな、本気で考えてないんだもん。そんなことないかな。私が本気で考えてないからかな。人生のことを、命のことを、じゃあ重く考えすぎてない？　これも違うか。違うんだよね……みんな、自分で考えてるんじゃなくて、どの派閥に属するかになってない？……命は大切派とか、無頼派とか、お金が第一義派とか……どれでもいいんだけど、それは、必ず「誰かと一緒」なんだよね。自分自身じゃないんだ……あたしの言いたいこと、わかる？　あたしよくわかんないんだけど。

お前に分(わか)んない事が俺(お)れに分るか。俺(お)れはそう思ったし実際其(その)ように返信した。大学だって、就職に有利というからそれを鵜呑(うのみ)にして這入(はい)った丈(だけ)だ。正子(しょうこ)には嫌われても構わないから何所(どこ)も繕(つくろ)わなくてよかった。いつ此(この)縁がきれても構わないと思えば醜(みっとも)ないことも平気で言えた。正子(しょうこ)はどう思って居たのかわからない。その内此様(こん)なメールも来た。

狂気の事、考えたことある？　狂気と正気って、反対のものなのかな。そんなことない気がする。気が狂ってる人って、きっと、正気があるから気が狂ったんじゃない？　それか正気のせいで気が狂ったんだよ。私、手首を切ること、考えることがある。いや切らないけどね。切れないんだ……それを昔は、度胸がないからだと思ってた。

でもね、この場合、私の場合の手首を切るっていうのは、非現

実に向かう行為なんだ。死ぬためじゃないの。だれかに私は気が狂ってますって見せたいだけの、行為なんだよね、多分。だから私が手首を切るためには、正気をなくさなきゃなんないんだ。そんで正気をなくすのは狂気じゃないの、陶酔なの。陶酔だけが正気をなくすんだ……そんで、それは本当の意味ではなくなってないの。見えなくさせるんだ。自分に酔って気が狂った気になって、そうした時にようやく手首が切れるんだと思う。

私は変人なのかなって自分で考えることがある。でも、本当の変人は、自分が変なんだってことさえわからないんだよ。自分がまともだと思ってるの。だから私は変人じゃない、でも真っ当な人間とも思えない。私は、なんなんだろう……いつも中途半端。私がこういうことというのも、〇〇に、私が変なやつだって思ってほしいからなんだよきっと。

俺にとって、お前は、変っていうかめんどくせえよ。よくわかんねえ。俺は狂気のことも正気のことも考えたことないよ。自殺なんてする人間は馬鹿だと思ってるしそれを考えたこともない。手首、切る前に、俺に連絡しろよ。俺なんもしねえけど。とめもしねえし見届けるのもごめんだけど。でもいつの間にか死んでたら後味悪いじゃん。多分事前に連絡された方が後味悪いだろうけど、知らないよりはましじゃんよ。そんなことねえかな？　よくわかんねえけど。

俺いろいろよくわかんねえんだ。考えるのもめんどくさい。だって、考えたって、わかんねえじゃんよ。その時正しいと思ったことするよ。だから、もしかしたらお前とめるかもしんないけど、それは別にお前のこと好きとかお前に生きていて欲しいとかそういうことじゃねえから。こんなこと言う必要ないか？　よくわかんねえ。

大学にはいってから、あいつはこんなメールを送って来る事が多くなった。勉強に埋れる必要がなくなって、時間ができたからだろう。閑暇になったんだ。普通こんな悩みをもつのは高校生とか十代のころじゃないかと俺れは思っていた。俺れたちもうすぐ二十になる。いい大人だ。夫が生きるだ死ぬだの正気だ狂気だの考えてたら仕事なんてとても出来ない。でも考える人間はいるんだ。能天気な俺れは思いおよばなかった。だから彼奴と接するのが怖くなる。めんどくさくなる。だから距離を取り度いのにあいつから連絡がこないとちゃんと遣ってるのかとときどき思い出した様に思う。

それから半年程又連絡が杜絶えた。俺れは彼氏ができたんだろうと思った。夫は好い事だと思ったがはたして其彼氏はちゃんとあいつを支えてやれるだろうかと不安になる。心配になる。其所らにいる男があいつをあの重っ苦しい女を厄介に思わずにいれるだろうか。無理だろうと俺れは考えた。だからと言って俺れが支えて遣ろうとはみじんも思わない。むりだ。それに俺れは其頃夢中になってる女の子がいた。年下の女の子だが全然も確乎した可愛い女の子だった。名を沙依ちゃんといった。しかし沙依ちゃんは俺れに振り向いてくれなかった。俺れの遣様がまずかったと言えばそれ迄だ。然し沙依ちゃんには彼氏が居てその彼氏とは非常にうまくやって居た。のめり込んで居る訳でもなく冷めている訳でもない。俺れの這入る余地はなかった。

俺れは捨鉢になって居た。ところへ正子からメールがきた。夫には死にたいだとか左右いう気分になる時があるだとかかいてあった。つい最近迄彼氏だった人は、あたしの事、重いだって。まだなんにも言ってなかったんだよ。〇〇に送るみたいな気もち悪いメール送った事もない。なのに重いなんてばかみたい。私の事なにもしらないくせに。という様な内容がつらつらと列べてあった。俺れだってお前の事何も知らねえよ、俺れは思ったが俺れは彼奴に今度どっか出懸けないかと送っていた。捨鉢だった。あいつの夫への返事は斯うだ。

ごめん、なんか、そういう気分じゃなくてムリ。〇〇の気持ちはうれしいけど、受け取れない。私、あの彼氏のこと、本気だったのかなあ……いまでは、どこが好きだったんだろうって思ってる。だから、ごめんね。私当分彼氏作らないかも。

なんか俺れ失恋れたみたいになってねえか。なんか、気晴しに、どっかいこうぜって誘った丈なのに……俺れは携帯を前に呆然と仕た。夫から少し笑えることに気づいて笑った。俺れってかっこわるい。

五

沙依ちゃんとメールしてると時々違和感をおぼえる。絵文字鱈化のかわいいメール。俺れも絵文字をつかう。「。」なんて殆んど使わない。俺れと正子はいつから絵文字を使わなくなっただろう。最初は絵文字をつかって居た。ごく尋常な現代的なメールをしていた。今だって現代的だろう。じゃあ現代的じゃなくて機能的か。相手に不快を与えない為の、感情を暈すテクニック。それが悪い事だとは思わない。当然の処世術だろう。しかし、其処世術の所為で、俺れは沙依ちゃんの感情に近けない。

沙依ちゃんは一歳下なのにとても能く出来た子だ。気配ができ、冗談も言え、決して人を不快にさせない。彼氏もいい奴だから忿つく。夫でいて美男美女って感じじゃない。彼氏はかっこ好くない。でも好い奴だからむかつく。

正子は俺れの誘いを断った癖に酒をのもうと誘って来た。俺れは忿怒いてたし根にもっていたので断われば いいのに行った。酒が飲みたかった。酒の場で正子は彼氏への未練を愚痴々々話し、俺れは沙依ちゃんのことを考えてほとんど聞き流した。

正子からメールがきた。

ここ最近、眠れない日が続いてる。気分が不安定なんだ。もう二週間ぐらいそう。気分が不安定な時の夜って怖い。眠れないから、ずっと考え事をくり返すの。気が狂いそうになる。そんな時に狂気のことを考えるんだ。狂人は、いったいいつから狂人になるんだろう。ある日決定的なできごとがあって気が狂うのか、それとも少しずつ「そういうもの」が溜まっていって気が狂うのか。私にはまだよくわからないけど、時々、もう気が狂ってたらどうしようって考える。

俺(お)れは大した返信をしなかった。その二週間後くらいにまたメールが来た。

波のこと信じてる？　あらゆるものには波があってさ、気分にもそうなんだ。いままでの経験で、いつか浮上することがわかってるから耐えられるのに、なんで？　いつまで経っても気分が変わらない。いつまでも重く苦しいとこにいる。なんで？　いままでこんなに長くだめだったことなかった。眠れないのが怖いよ。夜になるのが怖い。夜の怖さを知ってる？　私はわからない。わからないことが怖くてしょうがない……

俺(お)れは今度は、ちゃんと病院に行って、睡眠薬をもらって来た方がいいんじゃないかと忠告した。何(なん)だったら一所(いっしょ)に行ってやるとも言った。彼奴(あいつ)は考えてみると言った丈(だけ)で処決(しょけつ)しなかった。あいつはどんな生活をしていたのだろう。何時に寝て何時におきてどういう生活をして居たのだろう。分からないが其(その)二週間後位(ぐらい)に又(また)メールがきた。

だめだよ、だめだよ、もうなにも考えたくない。私○○にそばにいてほしいの。なにもしなくていいなにも言わなくていいただ

そばにいてほしいの。でも、それは、〇〇でなくてもいいのかもしれない。ああ、そんなこと考えたくないよ。なんでもいいじゃん癒されれば。でもわかんないんだ。もう〇〇のこと好きじゃないと思う。大切だとは思うけど、好きとか恋愛とかの感じじゃないと思う。それなのに〇〇のこと利用しようとするの卑怯かな。卑怯とかそんなのわかんないよ。ただだれかにそばにいてほしいんだ。そんで抱きしめててほしい。なにかしてほしいんだ言葉をかけてほしいの。矛盾だようそついてる。やさしい、やさしい言葉をかけてほしいの。でも的外れな慰めじゃなんの意味もないの。言葉をかけるなら私の芯に届く優しくてあったかいすべてを包み込む言葉じゃないと意味ないんだ。そんなのだれにも言えないじゃん！　私が求めてるのは私自身なんだ。ばかみたい。ばかみたい。死んじゃいたい。死んじゃってもいいかな……〇〇は怒るかな。またわかんねえっていうかな。わかんなくていいと思うよ。わかんないことは、わかんないっていえるほうが、ずっと潔くてかっこいいと思う……

俺はメールを見て直に電話した。繋がらなかった。とり敢ずバイクにのって正子の家にむかった。本当にめんどくせえと思った。俺はなにやってんだろうと思った。俺は沙依ちゃんに告白しようと思って居た。告白して玉砕してつぎの恋に向うんだと思っていた。然しとんだ邪魔がはいった。俺の心は掻き乱された。お前は頭が可怪しいんだよといって遣りたかった。だから旨くいかないんだ……まあ、俺も、うまく行ってないけど。

彼奴の家の近くにくると亦電話した。よく考えてみると俺は近所にきた事があるだけであいつの家をしらなかった。電話はプルルルと音がしてとなりの公園から着信音が流れた。正子がベンチに座っていた。

「何やってんだよ」

正子はベンチに座った儘俺れを見た。俺はバイクを降りて彼奴

のそば迄転がしていった。

「バイクの音がしてね」

「うん」

「バイクの音がして、〇〇が来てくれたんじゃないかって思ったの。だからそとに出て来たんだけど、違った。全然違う人だった。当たり前だよねって、くる訳ないよねって思ったんだけど、バイクが通る度にびくっとしたから、結局外部に居た。遅いよ。私一回家に帰って、御洒落な上着選んでから又来たんだから」

俺れは溜め息を吐いた。なにか言う気がおきなかった。正子は

「でも、きてくれたんだね、こう言う事もあるんだね」といった。

「来るかも知れないし、来ないかもしれない。確率の問題じゃないんだ。可能性が何方にもあるって問題なんだ。お前は俺れの事期待してたかもしんねえけど、俺れがメール気付かない可能性だってあったし気づいてもお前の事なんか放って置いたかも知れない。まあ夫でもまってたってのは根性ある事だと思うよ。いつだって可能性なんだよな。自分の思い通りにいく可能性なんて殆どねえんだ。でも、またなきゃ、その可能性は得られないんだよな。めんどくせえな本当。希望もあるし絶望もあるんだ。好いじゃねえかそんなんどうでも。自分が、何を、欲するかだ。希望も絶望も、べつにとり上げるほどのものじゃない……」と言う様なことを俺れはもっと紛雑混雑と考えて、結局なにもいわなかった。能く分らなかった。正子もなにも言わなかった。俺れは気づまりだから沙依ちゃんに告白し様と思って居た話をした。沙依ちゃんが甚然いい子である事、でも彼氏がいる事、俺れは夫に中って砕けてまた明日にむかうんだと話した。俺れが面白可笑く話したのに正子は笑わなかった。と言う事は俺れの話しが面白可笑しくなかったと言う事だろう。俺れは落胆した。正子は笑わなかったがいつかの時の様に怒り出すこともなかった。沙依ちゃんの人品外貌を訊いて、納得したり、興味なさそうな合槌を拍ったりした。正子も狂気だか正気だかの話しをする事はなかった。恥ずかしいのだろうか、それとも特に思いつかない

のだろうか。俺れたちは当り障りない平生の話をした。

ただ最後に正子がいった、

「あんな訳の分かんないメール送ったらね、一寸、スッキリしたのかも」

俺れは言った

「もう二度と送るなよ」

夫から二三カ月は平生のメールをして又連絡がとだえた。俺れは彼氏が出来たのだろうと思った。俺れも彼女ができた。それは沙依ちゃんではなく全然別の人だった。沙依ちゃんには告白さえ仕なかった。俺れは正子に話したせいで俺れの情熱が吸い取られたんだと解釈した。連絡が杜絶えてから半年がたとうとしていた。

いつもなら漸ろ連絡が来る筈だった。俺れはそれを楽しみにはしていなかったが嫌悪してもいなかった。あいつに、ぴったりの彼氏が見付かれば宜いなと思った。そんで彼奴を支えつづけてやればいい。其様な人間が居るとは思えなかったがいないとは言い切れなかった。すべては可能性の話しだ。どんなにすくなくても、あいつがそんな理想の彼氏と出逢える可能性だって、なくはないんだ。かぎりなくゼロに近いだろうけど。

俺れはひとりでテレビを見ていた。自堕落な生活をしていた。携帯電話が着信音を鳴らして、俺れは夫を手に執った。